

# 備陽史探訪

第89号

発行

備陽史探訪の会  
福山市多治米町5-19-8  
TEL. (0849) 53-6157

## 中山田城測量調査報告

城郭研究部会

去る二月二十八日(日)と三月二日(日)の二日間、城郭研究部会有志で「中山田城」の平板測量を実施したのでその成果を報告したい。

中山田城は福山市熊野町の標高一六三m、比高六〇mの丘陵(民有地)に立地。「甲谷城」「夕免城」「夕目城」ともいう。旧沼隈郡山田村中山田と下山田との境、「甲谷」という集落の奥、南東に伸びた丘陵上に築かれた山城である。

主郭には神社が祀られている。主郭の広さは約九〇〇㎡、山城としては中規模である。

縄張り(設計)は連郭式山城である。主郭である一郭から南西へ下る大手道に沿って二郭、三郭、四郭を配置している。その先は二本の堀切で尾根を断ち切り、さらに先に小規模な飛び郭を置いている。

裏手は、一郭背後の北東部を土塁

で囲み、その先を高さ約一〇mの切岸としている。

切岸の裾には二本の堀切を設け、ともに一方を南東に伸びる堅堀としており、谷筋の備えとしている。主郭の北側後方は、堀切より続いて畝状堅堀群を設け、さらに腰郭を構えて谷筋の備えとしている。

大手道の虎口は一郭と四郭に明確に残っている。その虎口には防禦のためと考えられる腰郭が設けられている。また、現状では明らかではないが、南側の二郭、三郭、四郭の接合部にも、堅堀と思える遺構と一体の虎口があったように見える。

一郭の北側に畝状堅堀群上部に通じる裏手虎口がある。また、一郭南東側にも裏手虎口と思われる痕跡が残る。両方の裏手も堀切に通じていたような跡がある。また、畝状堅堀群上部にも帯郭が設けられていたと思われる跡がある。

遺構は全体としてよく残っており、総合的に判断して中世後期(戦国期)の山城跡と考えられる。

「夕免」とは「免田」からくる地名ではないかと思う。これが夕免城、夕目城という城名に転化したのではないだろうか。城の近接地には、今は池となつており、「光林寺」という地名が伝わっており、かつての寺跡だという。

城の南西を昔の鞆街道が通り、街道周辺には軍原、千人坪(墓地)等の戦いに関係すると思える地名が伝わっている。近くに備後の中世豪族宮氏の一族と思われる「宮近門」の墓石と伝える宝篋印塔がある。

中山田城に関係する武将については不明。今後の調査研究を待ちたい。

### 《山城を理解するための註》

#### ▼大手・裏手

大手は追手とも表記。街道や城下に面した城郭の正面で、大手に開かれた門を大手門、それに続く道を大手道という。裏手は搦手とも表記し、大手の反対。一般に崖、川、海等の要害の地形である。

#### ▼郭(曲輪)

山頂部、鞍部、山腹部等で平らに整地された代表的な城郭の遺構。その用途や形状によってそれぞれ個別に名称がある。

#### ▼帯郭

帯状に削平された郭。一般に広い郭の下周りに築かれる。

#### ▼堀切(横堀)

城郭への通路を断ち切るために地表面を堀状に掘削し、その両側または片側に掘削したさいに出た土を積み上げた構築物。

#### ▼堅堀

山腹斜面を攻め上ってくる敵兵が横に移動するのを防ぐための構築物。斜面を縦に掘削し、堀の両側に掘削した土を盛り上げてある。

#### ▼畝状堅堀群

堅堀を数列平行に構築したもので、堀と堀の間の盛土が田畑の畝に似ていることからこう呼ぶ。

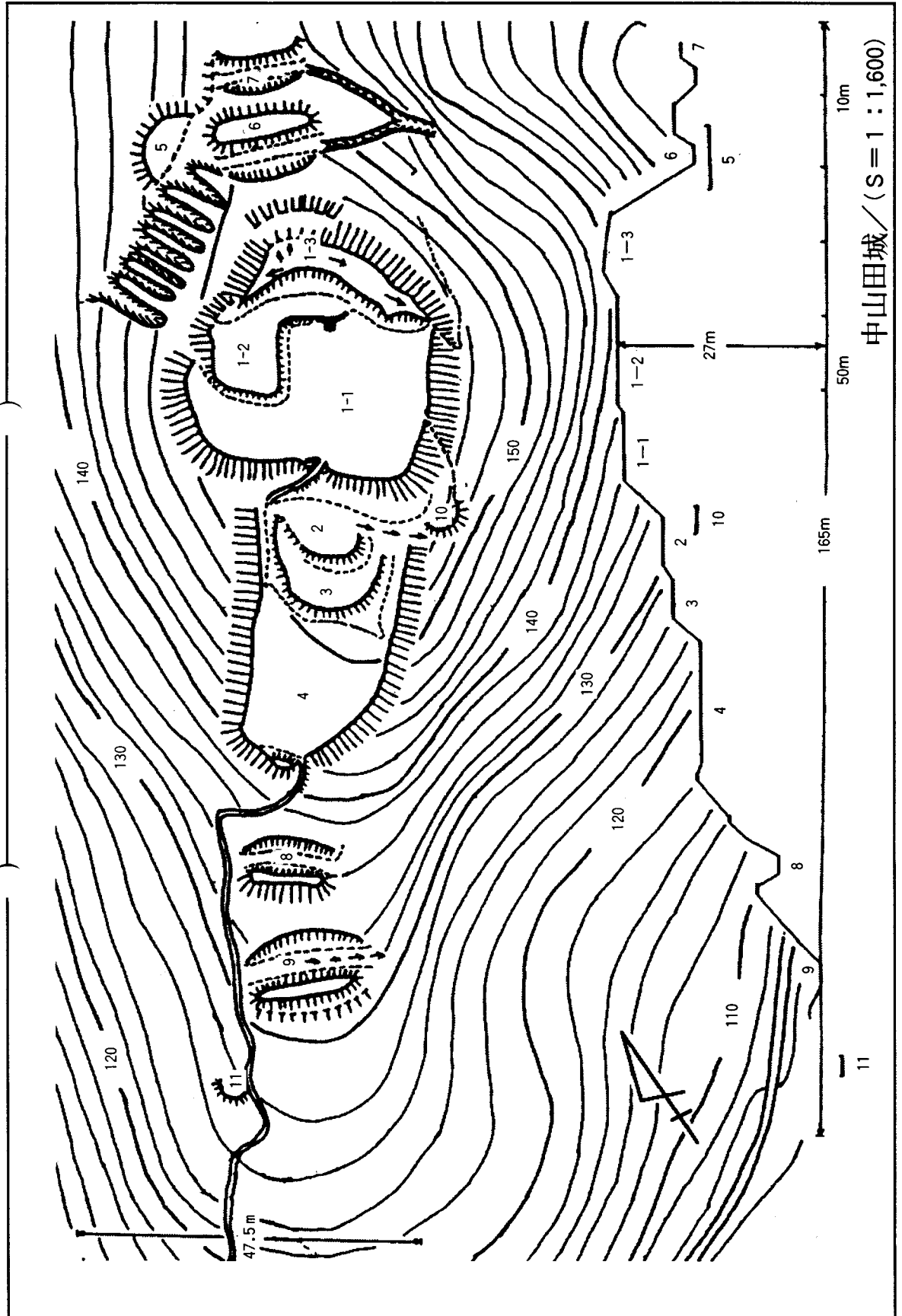
#### ▼虎口

城郭の出入り口。防禦施設で最も重要な構築物。

#### 《中山田城測量調査参加者》

備陽史探訪の会会員  
飯泉義晴、石田利夫、出内博都、小林浩二、小林さなえ、黒木日出人、坂本敏夫、塩出基久、高橋辰巳、田口義之、中山幸枝、七森義人、平井優三、平川寿水、平田雅郁、寶龜雅郎、宮宗昭子、三輪康嗣、安原誉佳

地元の参加者  
岸田皓行、小山章、小山稔、宮本博、元井泉市、柳井昌登  
敬称略・五十音順  
(トレース・文責 坂本敏夫)



## たたり

熊谷 操子

ずいぶん前から気になっていた京阪電車萱島駅の大楠。これをしげしげと見たくて、初めてこの駅に下車してみた。この巨木は七百年も前から地元の人たちと一緒に育ってきたもので、周り七メートル、高さ二十メートルというから驚きである。高架ホームの屋根を突き抜けて枝葉を広げ、楠特有の香を放ち、豊かな緑を誇っている姿は実に見事である。

改札口を出て半回りすると、栓皮葺きの社があり、横にこの楠がしめ縄を張った姿でデーンと構えている。なにかしら身体がジーンとひきしまる思いがしたのは、樹木から迸る神秘性みたいなものだろうか。見上げると大小あわせて十五、六個のトタン蓋をかぶせた伐り跡がある。大きいものは直径六十センチぐらい。

今から二十七年前、京阪電鉄が土居と寝屋川間を高架複々線にと建設計画を立てた際、この楠が一番問題になったとか。私が聞いた噂話によると、地元の反対を押し切って処理しようとした時点で、関わたる人たちが次々と難を受けたので、大きい電鉄

会社ともあるうものがビビって、これは「たたり」であろうと、すぐ工事を中断したということである。

その後、地元の人たちのこの楠に寄せる尊嵩の念を大切にせねばということになり、人々に安らぎを与えてきた祈りの対象を駅とともに残すべく近代建築と大樹との見事な組み合わせ工事に踏み切ったとか。

「野次馬が面白半分に見に来たのはごさいませんよ」

と言いつつながら、ちゃんとお賽銭をあげ、鈴を鳴らし、まじめに掌を合わせ、この神社をあとにした。

日本は建国当初から、怨霊の鎮魂をととても大切に考えてきた国で、それを国家の行事の一つと考えてきた。

政治に怨霊が関わってきたこと、日本史を騒がせた悪霊達のことなど、数えあげると枚挙にいとまがない。

悪霊と化して天変地異をもたらした物の中で、私の頭を一番にかすめるのは、太宰府に左遷され、死後怨霊となって跳梁した菅原道真のこと。

阿衡事件に功績があった道真は、宇多天皇の信任を一身に集め、任地の讃岐から都へ呼び戻された。ここから学者道真が政治家としての躍進を始める。このことよって二十一歳の青年天皇をして理想政治への熱意を燃えさせることになる。

やがて阿衡事件の元経は亡くなり、宇多天皇は讓位して上皇となり、醍醐天皇や時平の時代に移るのである。

時平は、道真の破格の出世を以前からねたんでおり、藤原菅根らと計り、捏造した讒言で道真の追い落としを天皇に持ちかけた。結果太宰府へ事実上の流罪という事になる。

道真の死後五年を経て、その怨霊は都に現れ、最初に襲ったのが藤原菅根。道真が天皇の侍読にまで推した人物である。その翌年の九〇九年最大の標的である時平にたつた。

時平三十九歳であつたという。その一族にも手を延ばしたので次々と夭折。その中には狂い死にした者も。

さらに跳梁した悪霊は雷神と化して、大々的に清涼殿を襲った。雷神と稲妻と豪雨で清涼殿は大きく揺れ、火柱は荒れ狂い、焦熱地獄はたちまち阿鼻叫喚のるつぽと化したという。天皇もこの後体調を崩し間もなく崩御。

都の人々は、これは配流の地で多くの恨みを残して他界した道真のたたりであると信じて恐れ戦いた。

そこで時平の弟忠平は、この怨霊を鎮めるため、延暦寺第十三代座主の大僧都法性房尊意に、十一面観音の秘法である呪文を唱えさせた。さすがの怨霊も、この呪文の前には手

も足も出せずに鎮まったという。

さらに時平は、京都北野に天満宮を建て、彼を神として祀った。そしてそのあとも鎮魂のために、夥しい寺域の法性を建てて供養し、それを後に一族の氏寺にするのである。

ちなみに、忠平、道真、法性房尊意、橋広相（阿衡の任：の辞を書いた人物）らは密接な間柄であつた。梅原猛著「京都発見 地霊鎮魂」の一節によると、

道真の霊は、忠平と共に甚だ密接な関係にあつた延暦寺代十三代座主の大僧都法性房尊意を訪れ、「復讐を遂げたい」という意志を述べた。けれども尊

意が反対したので、道真の霊は大変怒りざくろを口に含んで持仏堂の妻戸に向かつて吐くと、ざくろは炎となり妻戸は忽ち燃え上がったという。

とあつた。友人であつた尊意も賛成してくれないので、ことあとすぐ（九〇八年）藏人頭の菅根にたたり始めたというわけである。

いまの世の中で「そんな事」と一笑い付す向きもあるかも知れないが、怨霊とか、たたりと言うものは、現代の学問で論理的に説明することは不可能だといわれている。全面的に否定できない何かがあるのだろうか。

# 神々の黄昏 たそがれ

## 佐藤壽夫さんの死を悼む

平田 恵彦

佐藤壽夫さんが亡くなった。

会長から知らせを受けたときには正直驚いた。「死」という言葉に縁遠い人だと思っていたからである。じつさい佐藤さんは、行動力とバイ

タリテイーにあふれ、外見的には健康そのものだった。とても心臓に持病がある人のように見えなかった。

「心臓と頭以外はどこも悪いところがないんよ」と、ユーモアたっぷり話されていたのを思い出す。

佐藤さんは歴史研にとつてなくてはならない人だった。持病のせい为例会こそそれほど参加されなかったが、会報の常連投稿者だったので一般会員の方も紙上でその名をよく目にされたのではないかと思う。

とくに「古事記」については一言をもっておられた。月一回の勉強会「古事記を読む」には入会以来、昨年の秋の発作で倒れるまで一度も欠かさず出席された。座長を務めていたばかりは、佐藤さんの鋭い質問にはいつもタジタジだった。「古事記」を読む視座や日本の神の本質をどうみるかという点ではよく佐藤さんは意見を異にしていた。

当初たがいのことがよくわからず激しい論争をしたこともあった。しかし、決して仲が悪かったわけではない。佐藤さんがどう思っていたかは分からないが、ぼくにとつては年上の親しい友人であつたし、「好きもの」という点では同志だと思つていた。個人的な旅行も二回だけだが一緒にすることがある。

そのうちの一回は昨年二月、二泊三日で河内・大和をめぐる旅である。飛鳥周辺も歩いたが、生駒山麓・平群谷から葛城山麓かけての、あまり観光客の行かないような場所を中心に探訪した。こういう旅はほんとうの「好きもの」しか誘えないのである。もう一回は昨年十一月、高砂・明石・神戸の史跡をたどつた旅だった。この旅行の直後に佐藤さんは何度目かの発作を起こして入院されたのである。

以下、佐藤さんとともに大和を旅した思い出の一こまを記して故人を偲ぶことにしたい。

\*

大和盆地は東を青垣山、西は生駒・葛城・金剛山地、北を平城山、南は吉野の山なみによつて囲われている。大和の国中を望むときは青垣山の側から眺めるのが一般的だが（たとえば松原神社から少し下つたあたりか

ら）、葛城山の側から観ると、まったく違った光景に映つて興味深い。

それは単なる景観の違いだけではなく、古代、国中に勢力を張りあつた大王家と葛城氏の視点の相違という点にもなる。葛城氏が大王家に匹敵する勢力を持っていたことは、たとえば「古事記」の雄略天皇の条を読めばすぐにわかる。

雄略天皇が百官を率いて葛城山に登つた際、向かいの山の尾から登つてくる天皇の行列とまったく同じ装束をした連中に出会う。天皇はこれを見とがめて「吾をおいてこの国に王はいない」といった。これに対してその人物は「吾は悪事も一言、善事一言でいい放つ葛城の一言主の神ぞ」と名乗つたため天皇は畏怖し、太刀や弓矢を始めとした捧げ物を献上したという説話である。

この旅では、そうした葛城の神々、いいかえれば葛城の古い神社をできるだけ訪ねるつもりでいたのだが、ほかの史跡もいろいろ見学したので思つたほどには探訪できなかった。

一口に葛城といつてもその範囲は広い。北は葛城山脈東麓王子・香芝・広陵・上牧・新庄・当麻・大和高田から南は金剛山地東麓（御所）にかけての一带で、律令制下では葛上・葛下・忍海の三郡に分かれる。

この地域には式内社が三八座も集まつており（大和の式内社の約一三％）しかもことごとく神格が高い。

佐藤さんは高天原の伝承地のひとつ、高天彦神社にぜひ行きたいとのことだった。この神社は金剛山の腹のやや開けた台地にある。六年前ぼくが訪れたときは秋涼のころで、杉並木の参道の両側にコスモスが咲き乱れていたが、昨年は残寒の候でかなりの量の雪が残っていた。

社殿の前を葛城古道が通つている。参拝しようとしたとき一人の男性に出会つた。きつと金剛山から下りてきたのだらう。登山靴をはき、肩からアイゼンをぶら下げていた。

社殿は古いものではない。屋根も棧瓦だ。それでもこの地は下界と一線を画す別天地、あたりの空気は清浄で高天原そのものである。かつては大きな靈威を誇つたに違いない。

「万葉集」巻七（一三三七）にも葛城の 高間の草野 はや知りて 標刺さまし 今ぞ悔しき

（葛城の 高間の萱野を もつと早く知つて標をすればよかつた 残念なことをした 小学館版より引用）と歌われている。しかし現状を見る限り、高天原の神に以前ほどの羽振りが無いのは確かである。寒い。佐藤さんの顔には少し赤み

が刺していた。高天原を見てどうい  
う印象をもたれたのか、その表情か  
らは読み取れなかった。

ぼくが行きたかったのは葛木座火  
雷神社という式内名神大社である。  
かつては高鴨神社や鴨都波神社と並  
び最も高い神格を有した神社である。

ぼくらはその社殿の前に立った。  
司馬遼太郎は「街道をゆく」の中  
でこの神社についてこう書いている。  
「神社は、小さい。物置ほどに小さ  
い。弥生時代の穀倉とそっくりであ  
る」

否定的な表現のようだが、そうで  
はない。この章全体を読めば、司馬  
がこの神社に深い愛情をもっている  
のは明らかである。ただ、この地域  
の人々が葛城氏の裔であることの自  
覚を失いつつあるいま、葛城の神々  
が黄昏のときを迎えようとしている  
のは否めないのではなからうか。

ふと振り返ると、佐藤さんは境内  
に置かれている錆の浮いた巨大な大  
砲を不思議そうに眺めておられた。

\*

昨秋、佐藤さんが倒れられたさい、  
一冊の本を携えお見舞いにかがっ  
た。「古事記の世界」(西郷信綱著、  
岩波新書)である。それ以前に同じ  
著者の「古事記研究」(未来社)をお  
貸ししてあったのだが、ほかの本も

読んでみたいということだったので  
持参した。ぼくが病院を訪ねたと  
き、ちょうどその「古事記研究」を  
読まれている最中だった。三度目を  
読み返しているとのことだった。佐  
藤さんとしては、担当する郷土史講  
座(「記紀編纂の謎に挑む」)を予定  
していた二月から四月に繰り下げる  
ことになったので、さらに勉強して  
おきたかったのだと思う。ともあれ

「古事記の世界」をお渡しするとた  
いそう喜んでくださり、これからす  
ぐ読む、とのことだった。そういつ  
てもらえると見舞ったほうも本望で  
ある。

しかし、結果としてこの郷土史講  
座は実現しなかった。手術が決ま  
り、再度入院することになったから  
である。佐藤さんは「体の調子がい  
いから手術をすることにしたんよ」  
と元氣いっぱいだった。

亡くなられた翌日は「古事記を読  
む」の日だった。この日にはお見  
舞いに行くつもりだった。来年は  
必ず郷土史講座をやってください  
ね、約束は守ってくださいよ、ともう  
一度念を押すつもりだったのである。  
ひどいなあ佐藤さん、約束を守っ  
てくれないなんて…。  
いまはひたすらご冥福をお祈りす  
るだけです。 合掌。

### 事務局日誌

四月一七日(土)

「備後古城記」を読む。参加一五名。  
終了後、会報発送作業と四月例会  
の資料作成。

四月一八日(日)

四月バス例会「だれも知らないお  
かやま」参加五五名。久しぶりに  
雨の例会となりました。

四月二四日(土)

第四回郷土史講座「謎の武将毛利  
元康の実像に迫る」参加三四名。  
自作の大きな解説用の図を使用し  
ての大熱演でした。

四月二七日(火)

二十周年記念出版原案会議。参加  
田口・山口・出内・平田・安原。

五月一日(土)

古墳部会、古墳めぐりのコースの  
下草刈り。ご苦勞様でした。

役員会。古墳めぐりの打ち合わせ。

二〇周年行事の検討。参加一六名。

五月五日(水)

第一七回「回親と子の古墳めぐり」

参加一二五名。中国新聞とNHK  
が取材に。当日ニュースで放映、  
翌日の新聞にも大きく報道された。

五月七日(金)

佐藤壽夫さんご逝去。  
前号の「賀夜奈留美の謎」が遺稿

となりました。本当に残念です。  
五月八日(土)

「古事記」を読む。参加二四名。  
本文から少し離れて「土師氏と古  
墳」の関係について学習。

五月一六日(日)

歴史研徒歩企画「南北朝の争乱の  
跡を訪ねて」参加六三名。備中福  
山城の登山には泣きが入りました。

五月二二日(土)

「備後古城記」を読む。参加一五名。  
五月二二日・二三日(土・日)

秋の一泊旅行下見、好天に恵まれ  
る。予定コースをすべて検証して  
原案を作成しました。旅行委員は  
平田・寺崎・塩出。

五月二九日(土)

第五回郷土史講座「戦国水野氏の  
興亡」参加六三名。一般参加者が  
多く出席。於て市民会館会議室。

六月一日(火)

役員会。一泊旅行のコース、二〇  
周年行事、会費の値上げなどにつ  
いて検討。参加一六名。

六月六日(日)

六月バス例会「賀茂台地に中世武  
士の面影を訪ねる」参加四六名。  
この例会のあとしばらく例会なし。  
九月まで待つてくださいね。

★とくに断わりのない場合、会場は  
すべて中央公民館。

# 親と子の古墳巡りに参加して

匿名希望 ペンネーム あんこ

福山から、福塩線そして井原線に乗りました。井原線は運転士の一挙一動を目の当たりにできます。線路は高架で、車窓の景色も楽しめます。ですから子どもでなくても列車の先頭の窓に張り付きたくありません。

「御領停車！」独特の口調そして、指差呼称。こちらのほうが照れてしまいそうなほど近くであります。

ここ御領で列車から降りました。まだ新しい駅舎の階段を下りると、植え込みの中に、赤オニと青オニも私たちを歓迎してくれています。

(どっちが、権現山のオニだったかしらん?)

お昼までトイレがないと言うことで、早速トイレ休憩です。

さてしばらく歩いて、最初の目的地に到着。今日の講師の方が、今や遅しと一同の到着を待っておられました。

いよいよ古墳巡りの始まりです。「発会式(?)」という聞き慣れない言葉も聞こえましたが、それはともかく、H氏の言葉どおり、前日の大雨がウソのような、五月晴れです。まずは、法童寺古墳を見学します。

(ホードー寺にはホードー関係者も来られて…。こーゆうのを「寒い」と近頃言うらしい。)

私たち後半の班は見学の前にS氏から古墳についての話を聞きます。

しかし、話は聞きながら、足下に転がった枯れ木に群生するキノコ(?)が気になります。

いよいよ古墳を見ます。二十人位はゆうに入れるほど大きな石室です。石室の前で、話を聞きます。耳は説明を聞いてはいませんが、ニョキニョキと頭をだした筍が気になります。

(おいしそう!しかし、今日は人目も多いし、掘り探る道具も無し…) カタツムリを二匹見つけました。

国分寺では説明書きの看板の前に座って話を聞きます。まじめに聞くと思うのですが、講師の足下の石の上に何やらぶーんと臭いような物が…。目は自然にそちらに。

講師の話が続きます。

「…伽藍の配置ですが…」

「…今度は、金堂ですけれど…」

(ん? コンド ハ、コンド?)

次は、山登りです。日頃の運動不足がたたって、かなり足にきます。道沿いのお地藏様の数字を数えます。

ふうふう言って登ったら、一気に視界が開けて、神辺平野が一望できます。みんなの足下が表山古墳群。

大昔のものとは言えど、墓の上に人だかり。何とも妙です。

副葬品の説明があります。「切りこ玉」の説明に苦労するS氏。

来た道を下って、やっとお弁当です。先のグループはもう既に木陰を陣取ってお食事中です。

今日のI氏の履き物は、古墳巡りでは久々に目にする、しかし懐かしい履き物。そう、地下足袋です。S氏が着用されなくなつて以来、久々の登場。「あれはねトビ職の…」

と、Y氏が解説。  
(地下足袋と一口に言っても色々あるんだ!はい。勉強になりました。)

さて、昼食後のクイズの時間は、それなりに盛り上がりました。

Q:古墳を見学した時間は?  
A:五分

(あまりに暑いのでクイズ担当者がさむい場面を提供!)  
さて、景品はなんでしょう?

Y氏は、なかなかどうして、今時のグッズをよく御存じですから…。

午後は、迫山古墳を見学します。

迫山一号墳。大きいです。確かに寿司詰めにしたなら、八十人位は詰め込めそうです。

最後、迫山九号墳。入り口がかなり埋まっていますが、膝をつけば中に入れます。入ってみると中はかな

り広くて、天井も高いのです。(ここではなかったけれど、ほとんど腹這いになつてもぐつてみたら、石室の中は広がった。そんな経験は何年前にも在りました。)

一日の締めくくりは、夕方のTVニュース。今年は、講師の中では、山口さんがアップで映りました。

## 『古事記』を読む

《実施要項》

日時 六月一九日(土) 午後二時

七月一〇日(土) 午後二時

会場 中央公民館会議室

座長 平田恵彦さん(歴民研副会長)

テキスト代 一〇〇〇円

(岩波文庫ワイド版『古事記』)

資料代はそのつど一〇〇円程度

## 『備後古城記』を読む

《実施要項》

日時 六月一九日(土) 午後七時

七月一七日(土) 午後七時

会場 中央公民館会議室

テキスト代 一〇〇〇円

(既購入者不要)

資料代はそのつど一〇〇円程度

座長 出内博都さん(城郭部会長)

# お灯まつりの原理を考える

門田 幸男

熊野三山の一つ熊野速玉大社(和歌山県新宮市)の南約一キロメートルのところ知る神倉(座)神社がある。

別名大岩大明神ともいわれるように、御神体は「ゴトビキ(蛙)岩」と呼ばれる巨岩である。けれども、正直なところその形は蛙よりも男根によく似ている。男根はまた、蛇の頭にそっくりである。それで私は、ゴトビキ岩は原始蛇信仰の時代から崇められている、と考えている。

蛇を持ち出す理由を一つだけあげておこう。神倉神社の神紋である。この神紋は小さい三角を四つ組み合わせて大三角形としたものである。一般に三角形は辟邪の文様であり、これは蛇の鱗をデフォルメ(図案化)したものとされているのである。さて、この神倉神社の代表的な祭が「お灯まつり」である。今回はこの祭に隠されている原理を考えてみたい。旧正月六日(現行は二月六日)すなわち春に催されるこの祭は、祭神の性格をよく表わしている。陰陽思想では、蛇や竜は木気の春と東の方位(時間と空間)の守護神とされ

ているのである。

祭に参加する人(上り子という)が手に持った松明は松の板を五枚張り合わせた一本棒(那智大社の火祭の松明は違う形)である。これもまた祭神の蛇と相似だといえることができるのであるまいか。また上り子はみな荒縄で胴を巻いている。縄は蛇の交合時の造形(吉野裕子著「蛇」)だといわれている。

このように、お灯まつりには「蛇」の姿が見え隠れしているが、旧正月の初めに催されるので迎春の呪術であるようにも思われる。

祭の世話役(介錯)は祭の日に四角に切った餅を三つに重ねて藁で十文字に縛ったものを持って上がるが、これを地面に置いているので神様への意思表示と考えられる。

餅は金気の白色だから、以前書いた神島の「ゲーター祭」の縛ったミカンと同じ原理である。つまり木気の祭神に剋つ金気の代理として、これを呪縛して祭神を活性化して春の定着を促し、合わせて五穀豊穡を願う心が読み取れる。

祭の後の宴会では、白米の握り飯に白いカマボコなど白一色に限定されている。とくに白色のカマボコは木の板の上に金気の白色の魚肉の乗っており、「金剋木(金は木に剋

つ)の原理を形にしたようなもので、魚肉を剥がして食べれば木気が喜ぶという理屈。これを選んだ発案者の知恵には舌を巻く巧妙さである。

松明の燃え残りは神棚に上げて来年の祭の日まで拝む。そのわけは火の燃えかすは「火生土(火は土を生む)」の原理によって土気とされ、それが「土生金(土は金を生む)」の原理によって金気、すなわち家には金満を、家族には健康と長寿(金属は堅い。すなわち壊れないという理屈)をもたらししてくれると考えられているからである。

祭の時は山から麓まで炎の帯が出現する。この盛んな火もまた「火剋金(火は金に剋つ)」の原理によって金気を撃退して春の到来と五穀豊穡願い、木気の祭神(蛇が「金剋木」の原理によって害されるのを防ごうとしているのだと考えられる。

私はかつて神倉神社が熊野速玉大社の「新宮」と思っていた。しかしそうではなく、神倉神社の御神霊を平地に下ろしたものが熊野速玉大社だということである。それならば神倉神社を「元宮」、大社の方を「神倉神社新宮」といえばよさそうなものなのに「熊野速玉大社」という全然別の名がついている。それが何故なのか私は知らない。

## 新入会員紹介

CONFIDENTIAL  
備陽史探訪の会  
個人情報が含まれるため掲載できません。

## 会報九〇号の原稿募集

原稿締切七月一日(土) 必着。  
八月七日(土) 発行予定です。  
原稿は一号につき一人一本に限り  
ます(厳守)。本文「一行一六字×一  
二〇行」でちょうど一ページです。  
以下三二行毎に一ページの一段にな  
ります。四〇〇字詰原稿用紙を使用  
する場合は、下四字分を空白にして、  
一行一六字にして書いて下さい。皆  
様の力作を期待しております。  
今回は一ページ半以内でお願いし  
ます(依頼原稿例外)。

# 古墳めぐりに参加して

## 神辺中学校三年 小林裕文

五月五日、今年も古墳めぐりの日  
がきました。今年で参加五回目です。  
今回は神辺町の古墳をめぐるとい  
うことだったので、とても近いとこ  
ろに行くなと思いました。

初めに行ったのは、法童寺古墳で  
した。長さ約六メートルで、袖のな  
い無袖式の古墳でした。奥壁はとて  
も大きな一枚の石で、天井石もとて  
も大きい石を何枚も使っていました。  
両側の石は、左右対称になるように  
工夫してつくっていました。表面は  
きれいにするためにけずられていて  
とても感心しました。

この古墳はこの辺りでは、大きい  
方に入るぐらいの古墳じゃないかな  
と思えました。どんな人がこの古墳  
に葬られているのかと考えていまし  
た。講師の先生は、法童寺古墳は墳  
丘はもう流されているが、たぶん円  
墳で、六世紀後半以降につくられた  
古墳だろう、と言われていました。

次に国分寺に行きました。今の国  
分寺は山に近いところにあるけれど、  
昔は、もつと山より離れたところに  
ありました。東に塔、西に金堂、北  
に講堂という建物が建てられていて、

法起寺式ということがわかりました。

講師の先生は、東西・南北ともに  
一八〇メートルが寺院跡だと考えら  
れている、と言われていました。今  
はうめっているだけだけれど、もつと  
よく整備して保存してほしいです。

次に国分寺裏山古墳群という古墳  
を見学しました。講師の先生は、こ  
の古墳群は群集墳といって、狭い範  
囲に小さな古墳がたくさん集まって  
つくられているもの、と言われてい  
ました。たくさんあったかどうかは  
よくわかりませんでした。小さな古  
墳とはいえないような古墳もありま  
した。大人一人くらいしか入れない  
小さな古墳もありました。群集墳と  
いっても大きさはとても違うと思  
いました。

次に行った表山古墳群は国分寺古  
墳群をもつと行ったところの頂上に  
三基並んでつくられていました。そ  
の中の二号古墳はもう発掘調査され  
ていました。この古墳は横穴式石室  
ではなく、遺体は箱式石棺というも  
のに葬られていて人骨と玉類が残っ  
ていたそうです。その直径は一〇・  
五メートルから八・一メートルのゆ  
がんだ形の円墳でした。ほかの二基  
も円墳です。三号墳は五世紀の中頃  
から後半につくられたそうです。  
最後にこの古墳めぐりのメインと

いっていい追山古墳群に行きました。  
僕はこの古墳群に二、三回行ったこ  
とがありますが、何回見ても大き  
さには驚いて感心しています。

初めは三号墳の方から登って見て  
いきました。この古墳は円墳で、長  
さは法童寺古墳と同じぐらいの六・  
八メートルで、もしかしたら、同じ  
ころにつくられたのかなと思ったり  
もしました。石室は横穴式で、西を  
向いています。講師の先生は、普通  
は南を向いているので西を向いてい  
るのは特異だ、と言われていました。  
二番目に、この古墳群の中で最も  
大きい追山一号墳を見ました。やつ  
ぱりとても大きくて、感心しました。  
この古墳はやはり円墳で、横穴式石  
室の長さが一一・三メートルもある  
とても大きな古墳でした。一号古墳  
は発掘されていて、とてもたくさん  
副葬品がありました。その中でも環  
頭大刀というなかなか持てないよう  
な貴重なものも発見されました。ま  
たきて見たいです。

最後に九号墳を見ました。これも  
円墳で、長さ一一メートルの横穴式  
石室でした。一号古墳にひつてきす  
るようなとても大きな古墳でしたが、  
中に砂がつまっています。九号墳も西を向いていま  
した。

これで古墳めぐりは終わりですが、  
今回は古墳が多くてたくさん古墳が  
見れました。全体的にみると、横穴  
式石室が多く、六世紀代の古墳が多  
かったのです。このころからたくさん  
古墳をつくるようになったのかなと  
思いました。たくさん歩いたけれど、  
そのぶんだけ古墳が見れたので、と  
ても楽しかったです。

### 俳句五首

五月五日古墳巡り偶感

佐藤偶作

春蟬の声が時雨れる薄夏かな  
孫背負う額に汗の薄夏かな  
五月晴れ  
目に染む青葉キラキラと

親と子の古墳巡りや五月晴れ  
竹の子を見る人の目皆欲しそう

### 短歌二首

しまなみ海道 歌人 藤代由子

緑なる  
小島を結ぶしまなみの  
文化を運ぶ橋とならんか  
遙かなる  
思ひをここにしまなみの  
行き交う人の心晴れやか



# 事務局からのお願

## ▼ワープロの打てる方を大募集▲

ここ数年の会員数の増加によって事務局の仕事が増え続けているのに、会の運営事務を引き受けてくださる方が少なく、現在、ほんの数人でこなしている状況です。正直にいつて困っています。それでなんとか会員の皆様にお力をお貸しいただきたいのです。

いま、会員の皆様から送られてきた会報原稿はすべてワープロ原稿に打ち直した後、印刷に出しています。いわゆる「ワープロ出し」です。多いときには原稿用紙二〇枚分を打ち直すこともあります。これを担当編集者が一人でやっているのです。

ところが、担当者の仕事がとても忙しくなり、なかなか以前のようにはできなくなっています。

そこで、送られてきた原稿の一部をワープロ原稿に打ち直す作業を手伝ってくださる方を募集します。

ただし、テキストファイルをつくれるワープロ（ここ五年以内に購入したワープロならだいたいOK）か、パソコンのお持ちの方に限ります。

この件についてのお問い合わせは事務局の平田までお願いします。

（☎〇八四九一三三二七七八一）

# 会報への投稿についてのお願

## 『備陽史探訪』編集部

近ごろ何人かの会員の方から

「いまの会報は内容が難しくすぎて理解できない。投稿する人がほとんど同じで、書いてある内容も同じようなものが多くてつまらない。最近は行楽案内のところしか読まなくなっている。できれば少し紙面を変えてほしい」という声が寄せられました。

こうした意見について会報編集部としては反論が三点あります。

(1) 内容が難しすぎるといって困りますが、それを編集部にいわれても困ります。会報の紙面の多くは一般会員の投稿によって成り立っています。編集部が投稿された原稿を勝手に書き変えるわけにはいかないのです。

(2) これが最大のポイントですが、会員の多くは六〇歳以上の方々です。また、文章を書くという面ではほぼ全員が素人でしょう。そうした方々に、あなたの文章はつまらないから、もっと誰が読んで楽しんで、面白く面白く文章を書いてください、というのは少々酷なのではないのでしょうか。

しかし、いくらこうした反論をしても現実には会報（投稿原稿）をあまり読まないという会員の方もいらっしゃるようです。確かに以前の会報（とくに五〇号以前）と比べると、いまの会報は「面白くない」のようです。というよりも、気軽に読める文章が減って読むのにやや高度な知識を必要とするものが増えた、といったほうがいいのかも知れません。確かに私たちの会がいくら歴史の愛好者の集まりといっても、専門的な知識を持つている方ばかりではありません。というよりも、むしろそうした人のほうが少ないというのが実態に近いかも知れません。それで、いまの会報はある程度の知識がないと分からない、面白くない、読まない、という構図になっているのだと思います。

(3) 編集部としては、受け身になることなく、ご自身が投稿して会報をもっと面白くしていただければいいと思うのですが…。

しかし、いくらこうした反論をしても現実には会報（投稿原稿）をあまり読まないという会員の方もいらっしゃるようです。確かに以前の会報（とくに五〇号以前）と比べると、いまの会報は「面白くない」のようです。というよりも、気軽に読める文章が減って読むのにやや高度な知識を必要とするものが増えた、といったほうがいいのかも知れません。確かに私たちの会がいくら歴史の愛好者の集まりといっても、専門的な知識を持つている方ばかりではありません。というよりも、むしろそうした人のほうが少ないというのが実態に近いかも知れません。それで、いまの会報はある程度の知識がないと分からない、面白くない、読まない、という構図になっているのだと思います。

ですから、いま以上にみなさんに親しまれる会報にするためには、やはり編集方針を少し変える必要があるのではないかと思えます。そこで、五月一日に開かれた役員会でこれについて討議をし、次のように決まりました。

① 会員全員が参加できる紙面を作るという会報の原点を重視します。  
② 投稿はいままでほとんど無条件で掲載してきましたが、今後は編集部が内容を審査します。内容が難し過ぎる時やふさわしくない時には掲載しない場合があります。  
③ 同じ方からの投稿は三回連続して（一年に五回以上）は掲載しません。いいかえれば二回連続まで、一年に最多四回までしか掲載しません。  
④ 編集部で事前に設定した字数制限を大幅に超える投稿は掲載しません。ただし、ページ数に余裕がある場合はこの限りではありません。誤解がないようにいっておきたいのは、会報をただおもしろおかしいだけの無内容な紙面にするといいものではないということです。多し難しくて素晴らしい内容であれば、これまで通り掲載します。ただ、常連の投稿者のみなさんには、会員の中にこういう声があるのを知っておいていただきたいのです。

今号から以上のような原則を基本に編集しています。ですから今回原稿をお送りいただきながら掲載できなかった方もいらつしやいます。今後もしこういうことがあるかも知れませんが、ご了承ください。

# 秋の一泊旅行へのお誘い 豊穰の大地 播州平野をゆく

## ―東播磨国宝四寺院と 「播磨風土記」の里を味わう旅―

五月二日、二三日の両日、旅行委員三名で一泊旅行の下見に行ってみました。二日間とも好天に恵まれ候補にしていた史跡はすべて見ることができました。

今回の旅行のメインテーマは「播磨の国宝寺院を味わう」ということです。兵庫県には国宝寺院（建築）が四寺ありますが、そのすべてがこの東播磨に集中しています。四寺それぞれに個性的な寺院ですが、浄土寺はつい先日NHK番組の「平成古寺巡礼」で紹介されたばかりなのでご存じの方もいらっしゃるかも知れません。

浄土寺のある浄谷を中心とした地域は中世に東大寺領の大部庄があったところ。源平の争乱で焼失した東大寺を再建するため、経済的基盤の一つであった大部庄に有名な俊乗坊重源がその管理と信仰の中心としておいたのが「播磨別所」で、これが浄土寺の起りです。

浄土堂は建久八年（一一九七）に落成し、東大寺再建に用いられた天竺様という建築技法がとられていま

すが、この建築様式を完全に伝えるほとんど唯一の建築として国宝に指定されています。

国宝の阿弥陀如来と両脇侍はあの快慶の作で、阿弥陀如来は丈六の巨像です。部戸を通して堂内に西陽がそそぐと、まるで雲に乗った阿弥陀如来が来迎したかのようです。堂内が極楽浄土へと変わる瞬間を見事に演出しており、当日もちろん拝観していただきます。

もう一つの旅のテーマは「播磨風土記」に記載のある地を訪ねることです。「播磨風土記」は現存する数少ない風土記の一つですが、特色として地名説話を多く載せていることがあげられます。「播磨風土記」では地名の起りごとく、多くの場合、鹿（神の使い）と関連づけて語られることに特色があります。

たとえば「日岡」というところがあります。ここには日岡古墳群（前方後円墳五基・円墳三基）があって、そのうちの二つは有名な比礼墓（陵墓。景行天皇の后、稲日太郎女の墓に治定）です。なぜこの岡を日岡と名付けたのかというと、ここで鹿が「びー」と鳴いたので、「びおか」になったとあります（上古には「ひ」は「び」と発音されていました）。

そのほか「玉丘」「玉野」など地名

もオケ・ヲケ両皇子の妻問いの説話の中で成立しています。この地には風土記まで起源をたどれる古い地名が多いのです。

中道子山城は登山時間がかかりすぎるため今回は断念します。かわりに神吉城跡を戦国史ファンのために用意しました。この城は秀吉の播磨攻略に登場する城で「信長公記」に城攻めの様子が詳細に載っていることと有名です。いま本丸は常楽寺の境内になっていますが、滅亡した城主神吉民部少輔の墓があります。

今回の旅は、寺社と古代史・中世史がお好きな方にはとくにお勧めのコースです。ぜひご参加ください。

### 《主な探訪予定地》

★一乗寺（加西市坂本町）

天台宗の名刹。国宝の三重塔は承安四年（一一七四）に建てられた藤原様式の秀作。日本建築史上有数の三重塔で、簡素な中にも重厚な美しい塔として絶賛されている。本堂・大悲閣は寛永五年（一六二八）姫路藩主本多忠政の寄進で、再建された鶴林寺本堂の影響を受けている。境内は森厳で、雰囲気は素晴らしい。なお、この寺は西国観音霊場二六番札所になっている。

★浄土寺（小野市浄谷）

浄土堂・薬師堂・八幡神社をはじめ

め、阿弥陀三尊像・阿弥陀如来立像・重源上人座像、仏画、三角五輪塔、二十五菩薩面など仏教行事に関する遺品が数多く残る。このうち浄土堂は重源が東大寺再建の建築様式として採用した天竺様の数少ない遺構の一つ。また、その中には丈六の阿弥陀三尊立像が安置され、いずれも国宝に指定されている。

☆広渡廃寺跡（小野市浄谷）

国史跡。奈良時代中頃から平安後期まで続いた寺院といわれる。発掘調査で伽藍配置は回廊で建物すべてを取り囲む薬師寺式であることがわかっている。寺域は東西約一〇〇m、南北約一五〇mと推測される。なお、この廃寺の仏像のちに浄土寺薬師堂の本尊になった。

★朝光寺（河東郡社町畑）

国宝の本堂は、方七間の和唐折衷様式。床が高く堂々としており、室町初期における密教寺院本堂の典型として有名。内陣の唐様逗子も同時代の優れたもの。また、本堂東に建つ寄棟造りの鐘楼（重文）は袴腰の珍しい形をしており、鎌倉後期の特徴を伝える。

・北条の五百羅漢（加西市北条町）

謎の四百数十体の石仏群。製作年代はもとより、作者の意図も何一つわかっていない。「親が見たけりや

北条の西の五百羅漢の堂にござれ」と古くから唄われてきた。笑っている石仏、泣いている石仏、悩んでいる石仏、威張っている石仏……。人間的な匂いを漂わせ、ゆったりと瞑想する石仏たちはとても優しい。

◆酒見寺(加西市北条町)

真言宗の寺院で新西国二九番札所。天正年間に兵火で焼失したが、その後再興された。寛文二年再建の多宝塔(重文)は上層が檜皮葺で、下層が本瓦葺という珍しい形式。

・鴨住吉神社(加西市北条町)

播磨三宮で、北条住吉神社ともいう。酒見寺の守護神として崇められ、立派な建築物が同一境内に並んでいる。なお、社町からこの地域にかけては住吉神社の密集地になっている。

☆玉丘古墳(加西市玉丘)

古墳時代中期(五世紀前半)の代表的な前方後円墳で国史跡。周辺には九基の古墳があり、この古墳を中心に玉丘古墳群を形成している。この古墳を有名にしているのは、「播磨風土記」にその地名説話を載せていることで、オケ・ヲケの二皇子と美しい根日女の悲恋物語がそうだ。志染の里の国造の女根日女は二人の皇子に見初められるが、二人が譲り合っているうちに女は亡くなってしまふ。哀れに思った二皇子はその墓

に玉を飾って祀ったので「玉の丘」と呼び、その村を「玉野」と名付けたというものだ。

◇山伏峠の石棺仏(加西市玉丘)

県重文に指定されている。「石棺仏」は古墳に埋葬された石棺の蓋を転用して仏像を刻んだもの。加古川流域には石棺仏が多く見られ、この山伏峠の石棺仏はその代表的なもの。縄掛け突起のついている長持形石棺のものが珍しい。

・神吉城跡(加古川市東神吉町)

天正六年(一五七八)の秀吉の播磨攻め、神吉合戦の舞台となった平城。三木城攻略のため別所長治方の武将であった神吉民部少輔・神吉藤大夫らを攻め滅ぼした合戦で、「信長公記」に詳しい記録が残っている。

▽宮山遺跡・宮山古墳群

(加古川市八幡町中西条)

縄文時代の住居址と古墳時代中期から後期にかけての古墳群。加古川左岸の微高地にあり、史跡公園として整備されている。市史跡に指定。

☆西条古墳群(加古川市山手町)

国史跡。古墳群は六〇基あまりからあったが、宅地開発により多くが消滅した。しかし、加古川流域の最大の前方後円墳、行者塚(西口和彦さんが調査を担当)や人塚・尼塚は国史跡として残されている。

◇西条麿寺(加古川市西条山手)

県史跡。西条古墳群の中にある。発掘により中門と講堂の中間点に塔と金堂が並び法隆寺式伽藍配置であることが確認されている。現在は整備され公園となっている。

・日岡神社(加古川市加古川町大野)

式内社。正一位日向大明神ともいう。主祭神は天伊佐彦命。安産の神様として有名で、各地から大勢の人が参詣に訪れる。社殿に向かって右手に日岡御陵への参道がある。

★鶴林寺(加古川市北在家)

「播磨の法隆寺」と呼ばれる聖徳太子ゆかりの古刹。境内には一六棟の堂塔が建ち並ぶ。本堂・太子堂が国宝。藤原建築の美を今に伝える兵庫県最古の木造建築である太子堂の板壁には「九品来迎図」「仏涅槃若図」(いずれも重文)が描かれている。重文の仏像等の寺宝は宝物館で見学できる。

★は国宝 ☆は国史跡 ◆は国重文

◇は県重文および史跡 ▽は市史跡 (註)天候などの都合で探訪地を変更・省略する場合があります。

《実施要項》

日程 一〇月二三日・二四(土・日)

★雨天でも決行します。

集合時刻 午前七時三〇分

(厳守。四五分には出発します)

集合場所 福山駅北口

(福山キャッスルホテル前)

参加費 会員 二九五〇〇円

一般 三〇五〇〇円

(一乗寺入山料・浄土寺拝観料・鶴林寺入山料・鶴林寺宝物館入館料・小野市好古館入館料・加古川文化センター博物館入館料・傷害保険料・資料代込み)

募集人数 限定四八名(先着順)

申し込み 事務局に電話で

受付開始は六月十五日(火)から

(早めの申し込みをお勧めします)

★受付後、七月末日までに申込金として一万円をご納入ください。郵便振替用紙は後日送付します。残金は参加当日の徴収です。

キャンセル 申込金一万円について、一〇月二日(土)までは全額返金。

一〇月一六日(土)までは半額返金。

この日以後のキャンセルについては返金しません。

宿泊場所

「いこいの村はりま」☎六七五二四四三

兵庫県加西市笹倉町八二二一

☎〇七九〇一四四一―一七五〇

その他 朝食はすませてご参加ください。弁当は不要です。歩きやすい服装・靴でご参加下さい。今回は歩く距離があまり長くない、どなたでも参加できます。

第六回郷土史講座

四隅突出型墳丘墓の謎に迫る

四隅突出型墳丘墓は、文字通り、方形の四隅が突出した墳丘の裾や斜面を列石と貼石で囲った墓です。弥生時代中期から古墳時代前期まで、中国山地から山陰地方を中心に、北陸地方（こちらは列石や貼石を伴わない）にかけて造られました。

埋葬主体部は土墳が多くみられ、墳丘に壺・高坏・器台などの土器が供献されますが、副葬品は多くなく、あっても玉類などです。中には鳥根県出雲市の西谷三号墓（三〇m×四〇mの方形部に突出部がついている巨大な墓）のように、吉備で作られた特殊器台・特殊壺が出土する例もあり、古代吉備・出雲の結びつきを示すものとして注目を集めています。

四隅突出型墳丘墓は近年、発見が相次ぎ、出現期の様相も変わってきています。事務局のタイトルは「謎に迫る」ということですが、はたしてどこまで迫れるか。当日をお楽しみに。

【実施要項】

日時 六月二十六日（土）午後二時  
場所 福山市中央公民館会議室  
講師 安原蒼佳さん（評議員）  
参加費 資料代として一〇〇円程度

第七回郷土史講座

今高野山城主上原氏の滅亡について

上原氏は和智氏の一族で、備後の有力国人です。和智豊実の長男豊国が分家（惣領家は弟の豊広が継承）し、世羅郡上原村（現甲山町）に土着して上原氏を名乗ります。そして今高野山城を築いて大田庄を中心とした地域に勢力を張りました。

上原元将は元就の娘を妻とし、毛利諸将の中で重要な位置を占めていましたが、備中高松城の戦いで毛利を裏切って秀吉に内通したため、その後の両者の和議成立により失脚、歴史の表舞台から消え去ります。

七月の郷土史講座はこうした上原氏の劇的な滅亡について小林浩二さんにお話しいただきます。（編集部）

毛利氏の勢力は天正六年（一五七八）に播磨の三木城主別所長治と摂津の有岡城主荒木村重の服属により絶頂期に達しましたが、翌天正七年以後、別所・荒木両氏と石山本願寺が相次いで織田信長の軍門の下り、備前の宇喜多直家が毛利氏を離れて織田陣営に属したことにより、毛利氏の劣勢は決定的になりました。

さらに天正九年十月鳥取城が落城して備前・因幡より東は織田氏の勢力範囲になりました。天正十年三月、天目山の戦いで武田氏を滅亡させ後顧の憂いをなくした信長は、羽柴秀吉に毛利氏の討伐を命じます。こうして起こったのが、名軍師黒田官兵衛孝高の献策といわれている水攻めで名高い備中高松合戦でした。

この戦いでは毛利氏と外様関係であったにもかかわらず、備中高松城主清水宗治は最後まで忠誠をつくして武士の鑑と称せられたのに対し、毛利氏と縁戚関係にあった今高野山城主上原元将は主家を裏切りました。元将の妻は元就の娘であったため、救出されて吉田へ送り返されましたが、その後については何も伝わっておりません。没年・戒名・墓所もわかりません。おそらく身の置き所もないような肩身の狭い半生を過ごしたのもと思われまます。

戦国の世はまさに男の時代でしたが、その陰で元将の妻のような涙を流した多くの女性たちがいたことを思うと身につまされてなりません。

【実施要項】  
日時 七月二十四日（土）午後二時  
場所 福山市中央公民館会議室  
講師 小林浩二さん  
参加費 資料代として一〇〇円程度

【編集後記】  
磐座亭が入会して六年半、この間会員は倍増して約三百名、備陽史探訪の会は過渡期にさしかかっているかのも知れません。大所帯になったいま、来年の二十周年を前に会の方方を根本的に考え直す時がきているのではないのでしょうか。  
次号から編集者が変わります。かつて「焼酎力（ショーチュウリキ）」として鳴らしたあの問題の人物です。乞うご期待。（磐座亭主人）

訃報

佐藤壽夫（さとうひさお）さん

五月七日、入院先の福山循環器病院で急性心不全のため逝去されました。享年六十八歳。

佐藤さんは歴史研の評議員として活躍。「古事記」を読む会ではなくてはならない方でした。この四月には郷土史講座を担当されることが決まっていました。ご本人も楽しみにしておられたのに手術のため目前にして入院、そして逝去。ほんとうに残念です。 合掌

備陽史探訪の会事務局 ☎ 〇八四九

福山市多治米町五一―一九一八

〇八四九（五三）六一五七